寿でくらす人々あれこれ　５７

　僕自身のこと！？　その３

　父は福島県安積郡安積町生まれ。祖父は博労で、今でいう交通運輸労働者。磐梯山の噴火による避難民や役人・学者の輸送で大儲け！？したという。祖母は、なんとか村の村長の娘だとか。実家の仏壇の上に父の祖父と祖母の写真が飾られていた。祖父は小柄で丸顔の見るからに好々爺。祖母はまるで般若のような鋭い目つきの怖い顔で写っていて僕はずっとなじめなかった。祖母は常磐炭鉱の近くで銭湯を営み、野草にくわしかったことから薬湯として炭鉱労働者に親しまれたという。また、浅草から芸人を招くなどコーディネーターとしてもなかなかのやり手だったという。金貸しもやっていて、焼酎を引っ掛けて取り立てに行った。これは僕がかなり大きくなってから知った話。僕は、親やその親族に関する知識！？はほとんど知らず、弟や妹が父母の様々な故事来歴を知っているのに仰天したことがある。僕は全くと言っていいほど知らなかった。興味がなかったというのだろうか。思えばいつも外のことばかりに関心が向いていた。

父が81歳で亡くなりしばらくたった頃、父の人生や今の僕の年には何を思い、何をしていたのだろうということがしきりに気にかかるようになった。父の残した履歴書を手掛かりにそのルーツを知りたいと思った。しかし、父の壮年のころを知る人は既に近くにはいなかった。記載のあった「○○尋常小学校」に問い合わせた。いろいろと調べて頂いたが父の学籍はなかった。近隣の小学校も同じだった。履歴書は間違いか？偽りなのか？父は明治34年生まれ、尋常小学校に入ったとすると明治40年の頃だ。小学校に行かない、行けない子どもたちは多かった時代ではなかろうか。父もそうであったか?

　ある日曜日、母と次兄と僕は、車で母の記憶にある福島常磐炭鉱跡地を目指した。最寄り駅はＪＲ磐越東線の小川郷駅。目当ての付近をめぐり、出会った人に聞くなどしたが収穫はなかった。あきらめ半分で駅近くの神社の空き地で一休みしていた。母は境内をそぞろ歩いていた。母の叫ぶ声に行ってみると、大きな石碑の裏に寄付者の名が刻みこまれていた。母の指すところに「村田由松　五円」とあった。祖父の名前だ。あらためて集落へ戻った。集会所の広場で地域の運動会が行われていた。そこでテントの中にいる何人かの人に聞いた。祖母の「銭湯」のことを覚えていた人がいた。銭湯の地主さんが今も住んでいると聞いて訪ねた。ようやく、父の生活していた痕跡に触れた。

　地主さんに銭湯があった空き地に連れて行かれた。そこは低木の木々が茂っていた。丸石で積まれた当時の石垣が一部残っていて、地主さんは、「この辺はあと数週間で道路整備として取り壊される予定だ」と話した。縁なのかな、間に合ったのだ。父は当時、国鉄の線路工夫の仕事をしていたという。やがて、父は生活の糧を求めて横浜に出た。

　母は、千葉県は富津の出身。祖父母は米屋を営んでいた。火事を出した火元として住みにくくなり一家あげて横浜に移住したという。青雲の志とは言えぬ横浜の地で父と母は出会った。この来歴と出来事も僕だけは大きくなるまで一向に知らなかったのだ。

　僕はよく落し物、忘れ物をした。三つ持つと必ず一つ忘れた。貴重品であろうとなかろうと区別がなかった。買ってもらったばかりの憧れの皮手袋を一度もしないうち、駅の切符売り場に置き忘れた。母に怒られよく言われた台詞。「よく自分を忘れてこないな。首から下げとけ…」学生時代の冬、金沢に旅行をした。僕は時計を外しそのまま忘れる癖（今も）があり、時計をよく無くしたので持たされなかった。その時は父から借り母からくれぐれも無くさないように念を押された。旅の初日、夜行列車が目的地に着く少し前、顔を洗いに洗面所に立って時計を外した。暫くして気が付き車掌に届けたが後の祭り。帰ってから父に報告。父は黙って頷いただけだった…。何年か経って例の父の時計が目の玉が飛び出るほどの時計だと母から聞かされ驚いた。受けた恩に少しもお返しをしない間に父、母は逝ってしまった。母は、時々苦笑いをうかべながら「お前は七夕みたいだ」と言っていた。実家に年に一度顔を見せるか見せないかであったからだ。当時を思い返すたびに自分勝手で思いやりのない息子であったとつくづく思う。

　父との少ない思い出。家に風呂がない頃のこと、銭湯に行く時、父はよく僕を誘った。他の兄弟にはあまり声をかけなかった。一緒に行くと背中を洗わせられた。とにかく長いのだ。しかし、どういうわけか誘われると嫌だとは言いにくかった。銭湯の行き帰りに無口な父のもらす一言、二言になんとない温かさを感じていた。壮年のころは恐かったよと兄や姉は言うが僕は穏やかな父しか知らない。70歳の頃、父は乗用車にはねられ持病だった狭心症を悪化させ入院した。兄弟姉妹が交代で付き添い僕の当番の深夜、父の呼吸が突然荒くなった。僕はとっさに酸素ボンベを操作した。開けたのか閉めたのかよく覚えていないが、しばらくして父の呼吸が落ち着いてきた。後日、父から「あの時は苦しくて死ぬと思った。お前がやってくれなかったら死んでいただろう。」と言われた。僕はびっくりした。父からこんなことを言われるとは思いもしなかった。それに、あの時の父は寝続けていたので気がついていないだろうと僕は思っていたのだから。

　寿に来てはじめに取り組んだこと、もう記憶が定かでなくなってしまったが、寿地区で活動している団体の職員の方々、ドヤの管理人さんや商店を経営している方、地区のいろんな活動を生き生きとしている日雇労働者の方たち、子どもたちやお母さんたちと知り合うことでした。保育所への入所をすすめるために子どもたちがいる部屋を訪ねて歩きました。相談に来る方もいました。寿地区に自治会を結成しようとの呼びかけがあり寿地区の皆さんと一緒に活動する契機が与えられました。その傍ら並行して診療所、相談所、娯楽室の開設準備を進めました。11月に正式開所となり寿福祉センターの本格的な寿での活動が始まりました。12月にクリスマス会があり職安広場に1,000人くらいの子どもたちが集まりました。僕はこの時マッチ売りの少女の仮装をしていました。ぱっとスカートをめくられ「あっ！しろだ」と子どもたちの声。以後数年、僕は「オカマせんせい」と呼ばれました。由来は省きますがそのあとは「オオカミせんせい」でした。

　3回にわたって、自分のことを厚顔無恥にも書かせて頂きました。お付き合いいただき有難うございました。また寿に戻ります。

次回　僕の思う「寿地区とは」